

氏名(国籍)	丁 <sup>ちよん</sup> 貴 <sup>き</sup> 連 <sup>りよん</sup> (韓国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博甲第1,613号
学位授与年月日	平成9年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	国木田独歩と若き韓国近代文学者の群像
主査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 阿部軍治
副査	筑波大学教授 名波弘彰
副査	筑波大学助教授 新保邦寛
副査	筑波大学講師 博士(学術) 今橋映子

### 論文の内容の要旨

本論文の目的：1910年代以降の韓国の近代文学者が、文学修養時代に国木田独歩を始めとして島崎藤村、田山花袋、夏目漱石、有島武郎を読んでいたことはよく知られている事実である。とりわけ国木田独歩の短篇小説は、彼らをもっとも愛読した作品であった。韓国の近代文学の祖と言われる季光洙（イカンス）、近代短篇小説の開拓者とされる金東仁（キムトンイン）、そして韓国近代文学の成熟に大きく貢献したと評価される朱耀翰（ジョヨハン）、廉想涉（ヨムサンソプ）、田榮澤（チョンヨンテク）などは、いずれも独歩の作品を読み、その影響を受けているということは従来から概説的には指摘されてきている。しかし、それはあくまでも概説にとどまり、その影響、すなわち韓国近代文学における国木田独歩の受容を、厳密な比較文学的方法論を通じて実証する研究はこれまでなかった。こうした学界の現状に対して、著者はかねてより物足りなく思い、その影響関係を実証し、韓国の近代文学における独歩受容の現実の在りようを解明しようとしてきた。その研究成果の一端は、学会で発表された幾篇かの学術論文となった。こうした論文をまとめ、その研究課題をさらに深化・発展させたのが、本論文「国木田独歩と若き韓国近代文学者の群像」である。

本論文の方法：独歩作品との影響関係が見られる韓国初期近代文学者の作品を主に、インター・テクスチュアリティという考え方を中心とした比較文学的な理論に基づき、分析が行われている。韓国近代文学者が独歩の影響を受けたとすれば、それは独歩の何を、そしてそれをどのように受容したのか、つまりその近代小説としての叙述形式と内容（モチーフ、プロット、主題など）をいかに主体的に受容したのか、中心的な分析対象となっている。

本論文の概要：まず第1部では、短篇小説における叙述形式の受容の事実が指摘され、それが実証的に検証されている。ここでは、叙述形式を構成する幾つかの要素を比較分析することによって、韓国最初の近代書簡体小説『幼き友へ』（李光洙、1917年）には、独歩の書簡体小説『おとづれ』の影響が、また韓国最初の額縁形式体小説『ペタラギ』（金東仁、1921年）には、独歩の額縁形式『女難』の影響が認められ、さらに一人称観察者叙述形式の小説『白痴か天才か』（田榮澤、1919年）にも、独歩の『春の鳥』の影響が認められると結論づけられている。

韓国の近代文学史上初めて試みられた書簡体形式と額縁形式、そして一人称観察者視点といった叙述形式が、

韓国の旧文学でも西欧小説でもなく、日本近代文学、とりわけ独歩の一連の小説叙述形式を受容することで成立したという事実が確認されることによって、独歩は日本近代文学史における短篇小説の開拓者であったばかりではなく、その短篇小説の形式が、韓国近代文学の形成過程において、大きな役割を果たしたという事実が明らかにされた。

第二部は6章で構成されている。ここでは主に独歩文学の作品論研究がまず行われ、その作品に対して韓国の初期近代文学者がどのように対他的に認知し、そのことによってそれぞれの作家がみずからの固有の主題などを、どのように発見していったか、その過程がインター・テクスチュアリティの立場から分析されている。第二部のはじめの5章を構成する諸作品の題材とモチーフは、それぞれに「故郷」、「運命観」、「少年時代への追憶」、「白痴児」、そして「余計者」である。これらは独歩文学にはよく見られるものだが、本論文によれば、それらの題材とモチーフはいずれも独歩文学を受容を通して韓国近代文学が再発見していったものであるという。そして本論文では、廉想渉、金東仁、季光洙、兪鎮午（ユジンオ）、田榮澤、金史良（キムサリヤン）らが、この題材とモチーフの影響を受け、韓国の近代文学を創造していったことが実証されている。第二部は、このような課題を、個々の作品に即してインター・テクスチュアリティの立場から、彼らが独歩文学をどのように受容していったかが、考察されている。その個々の作品論研究は、本論文の中で最も優れた個所となっている。その結論によれば、彼らはそれを単に受容するにとどまらず、むしろそれぞれの生きた時代や社会状況のなかで、自覚的・主体的に受容し、独歩文学とは異なる独自の主題を獲得していったという。それゆえにこそ彼らが、韓国近代文学の形成過程を担い得たのだ、と結論づけられている。

第二部結章では、「独歩文学への新たな光—独歩文学の国際性をめぐって」が論じられている。ここではこれまでの論考が要約され、本論文が対象とした、国木田独歩が新たに切り開いた短篇形式は、当時新しい文学を求めていた韓国や中国の作家たちに受容され、彼らの近代文学の形成過程に大きな影響を及ぼしたとされる。日清戦争によって倒れて行く彼我の兵士や婦人、子供への暖かいまなごしを胸に秘めることで育まれた独歩の国際的な視座は、過酷な植民地状況を生きる韓国や中国の人々に、「連帯感」や「同胞意識」を与えた。それとともに、新しい短篇小説のスタイルが、東アジア地域における近代文学の形成過程に計り知れない影響を与えていったことが、今一度確認することができたとしている。

## 審査の結果の要旨

本論文は、従来日韓両国の間にわだかまる政治的・文化的な偏見が障壁となって大きな空白領域を生じていた、東アジア地域における日韓両国の近代化過程で両国の間にどのような文化的な交流があったかというきわめて重要な課題を、近代文学の成立過程という領域に絞って、偏見を超えて純粋に学問的な方法を駆使して解明しようとした労作である。この労作を完成させたのは、著者の日韓両国の次代の文化交流に賭ける熱意の賜物であり、この論文は学問的にも未開拓の領域を埋める成果として高く評価できる。

なによりも評価すべきは、このような比較文学研究が、日本の立場から見ると、西欧文学の模倣から出発しながらも、日本独自のものとして再創造された近代文学の諸作品が、さらに外国に発信されて、そこでどのように受容されたのかを明らかにしてくれるものとなっていることである。そしてそのことを韓国の立場に即していえば、日本近代文学の影響を主体的に受けとめることで、韓国近代文学の成立に寄与した作家や作品を正当に評価するためのすぐれた方法論たり得ており、特に東アジア地域における韓国近代文学の独自性の解明に寄与するものと考えられる。また、従来日本近代文学研究者の間には全くといってよいほど知られていなかった、韓国近代文学の資料が多量に提出されており、今後の研究者にとっても有益であると判断される。さらには研究内容においても、第二部の6つの章は、学会における日韓関係領域の比較文学研究の現在の水準に、十分到達しており、その論述には説得力がある。日本近代文学研究の側からいっても、独歩文学を韓国近代文学から照らし出すこと

で、その「小民」のテーマこそ、日本という一国を超えた普遍性をもつことが明らかにされ、独歩文学の作品解釈に新たな照明が当てられたと評価できる。ただ、本論文の欠点を挙げるとすれば、第一部の諸論文が単調で、構成と文体の影響・受容関係が何度も繰り返され、比較文学の方法論のうちでこれしか用いられていない点が難点である。第二部諸章の欠点としては、独歩文学の作品論分析において、時に物足りない論考が見られることが指摘できる。そのため、インター・テクスチュリアティの立場が徹底できなかったことが惜まれる。

以上を総じていえば、本論文は、新資料の紹介と分析、比較文学的方法論の妥当性、目的の達成度において、日韓比較文学研究に新生面を開き、また独歩文学研究においても、独創的で斬新な分析を加えており、当該の学界に寄与するところ、きわめて大といえる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。